鳴海の地名の由来

「鳴海」の読み方には、「なるみ」、「なるうみ」、「なるかい」、「なると」、「なりうみ」、「なきうみ」、「なくうみ」、「なめみ」などがあります。

「なるみ」という地名は、文字が無かったころ、既に奈良期以前からの地名と謂われていますが、成海から鳴海に変化した理由などよく分かっていません。また、鳴海という地名の由来についても未だ正確に定まっていません。

「鳴海」の地名の由来は通説として、海の潮騒の聞こえる地という、海潮による音響地名説が有力とされていますが、「緩傾斜地」も「なる」といいますが、地形的に見てふさわしくないという説もあります。

城址・砦

鳴海城（根古屋城）Ⓐ

「高札場」からすぐ北側に小高い場所があります。ここが、鳴海宿のランドマーク天神（あまつかみ）社です。天神社と通（庚申坂）の西の高台を含めた地域が鳴海城（根古屋城）址です。

応永元年（1394 年）に安原宗範が築城した東西 75 間、南北 34 間（『尾張志』）の平山城でした。

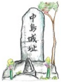
城は応永 25年（1419年）に一旦廃城になり永禄年間（1558-70 年）織田信秀が修築して山口左馬助義継を城主としましたが、信長が信秀の跡を継ぐと山口義継は今川方に寝返り、信長の攻撃にも耐えました。その後信長の謀略により山口父子が今川義元に殺され、今川義元の武将岡部元信が守備していましたが、桶狭間の戦いで今川義元が討たれて籠城し、義元の首と引き換えに開城しました。その後、廃城となりました。

現状は堀跡を拡げて多治見街道を通し、城跡は道の東西に分かれて残り、東側に碑があります。西側の遺構は鳴海コミュニティセンター、児童公園の建設に当り壊されました。

中島砦（中島城跡）Ⓑ

永禄３年（1560 年）の桶狭間合戦で織田方の砦として築かれました。広さは『尾州古城志』などに東西15 間、南北 20 間とあり、『中古日本治乱記』に250 騎で籠ったとあります。桶狭間合戦の当日（5 月19 日）、信長は善照寺砦から中島砦に入り桶狭間に向かいました。江戸時代には廃城となり後に砦の守将であった梶川平左衛門の墓として小さな塚を建立。その塚もいつの日か失われ、昭和２年（1927 年）に鳴海町により「中島城址」の石碑を供養のため建立。字中島は扇川と手越川とに挟まれる微高地で、字下中は字中島の地名を分割したものです。近年になり地域文化を守る会が毎年５月 19 日に中島砦の伝承のため信長公記の朗読と尺八、薩摩琵琶の演奏会を催しています。

街道の近くを歩くと、他にも戦国時代の歴史を語る善照寺砦跡等の立札を見ることができます。



中島砦跡

『鳴海 曲の手 せいりゅう街道』
編集：鳴海絵地図の会
朝岡晃弘、石田和義、伊藤隆義、梅田浩未、岡本佳代、
筧清澄、河合ふみこ、雉本鋭治、後藤宣正、小林多加志、
坂本美智子、須田みどり、竹中秋夫、西澤泰彦、野村昭男、
福島伸明、福田峯之、宮崎正和、山口敬子、山田美紀子、
山本ひろ子、横井尚武、若杉和秋、若杉享男（五十音順）
協力：鳴海学区連絡協議会
緑区の歴史を学ぼう会
岡本デザイン事務所
発行：平成 26 年 11 月
公益財団法人名古屋まちづくり公社
総務部経営企画室　℡ 052-222-2314

東海道 鳴海宿

鳴海は古くから海が迫っていたことから、京から鎌倉へ通じる鎌倉街道は熱田、鳴海、二村山と山の中を通っていましたが、海が鳴海から遠ざかっていく（応永元年1394 年頃）と街道も通行しやすい平地に移動しました。

鳴海宿は東海道五十三次の40番目に位置する宿場町で 39番目は池鯉鮒宿（現知立）41 番目には宮の宿（現熱田）がありました。

開設されたのは関ヶ原の合戦の翌年の慶長６年（1601 年）で笠寺村から東へたどり天白橋を渡り南に折れると「丹下の常夜灯」（現存）があり、ここから宿の町並みが続きました。相原町と本町の境あたりに曲の手（かぎのて）があり、本町と根古屋町の境あたりに高札場が設置されていました。根古屋町、作町まではほぼ東南から西北にまっすぐ東海道は通っています。

相原町から作町は、北側に鳴海城（根古屋城ともいう）の丘陵地帯、南側に扇川があり、そのはさまれた部分に宿場が発達していました。

高札場を過ぎて扇川の中島橋を渡ってしばらく行くと東の出入り口の「平部の常夜灯」（現存）があり、そこから有松村へと続いています。

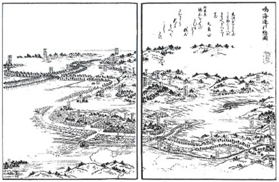
宿場の氏神は宿の北にある成海神社と南にある鳴海八幡宮で、裏方は成海神社、表方は鳴海八幡宮の祭礼を司っています。

作町扇川端を作川と言い土場があり酒荷等がこの水運を使い熱田沖の保田で千石船に積替えられ江戸へ送られました。

天保４年（1843 年）頃には本陣・脇本陣・陣屋等がおかれ問屋場も２か所設置され人口 3,643人、戸数 847 軒、旅籠 68軒（本町、根古屋、作町に集中）ほか茶店や名産「鳴海絞」を売る店が立ち並び賑わいを見せていました。

伝馬朱印状と同じ朱印を押した書状を持つ者に伝馬を提供するようにとなっていて、これによって鳴海村は宿駅としての公務を果たす鳴海宿となりました。

宿場北の丘陵地帯の麓、山の手辺りは寺町で東より行者堂（金剛寺）、瑞泉寺、浄泉寺、万福寺、円龍寺、庚申堂（円道寺）、誓願寺、如意寺、東福寺、長翁寺、光明寺が建っていて宿場の歴史を感じさせます。



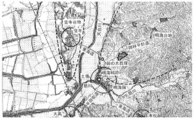
『尾張名所図会』小治田之真清水から鳴海迄の惣図（国立国会図書館蔵）

地形—自然環境と共生した鳴海宿—

鳴海宿は、尾張丘陵の南端に位置する鳴海台地を背にして鳴海城を南と西側を取り囲むようにして宿場は発展し、町の南側には、白土にある大池（昔は赤松池と言われました）を源流とした扇川が流れています。東へは鳴海有松絞りの生産地である有松、西へは作町から右へ曲がり右手の鳴海台地に沿うように町が伸び西の常夜灯を過ぎると鉾の木貝塚があり大昔から人間の営みがあった地域であると理解出来ます。地形的には鳴海台地と笠寺台地の谷間の低平地にあたる天白川を越えると一里塚、門前町の笠寺へと続きます。

又、扇川の下流域にある土場から年貢米、物資を熱田、江戸へと運搬されていました。物資の中には鳴海宿、東の有松の「絞り」、半田街道を南に下った大高の「酒」等、水との関係はかけがえないものであります。又、鳴海宿の高札がある本町から知多木綿の武豊、半田への半田街道、そして三河方面への入口、御林平針街道があります。

東海道が整備される前からの鳴海の歴史的背景から考えると自然環境を上手く取り込んだ宿場町として賑わった町でした。



※地形図は「明治 26 年 大日本帝国陸地測量部発行」のものを使用

曲の手（かぎのて）Ⓒ

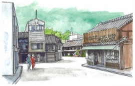
慶長８年（1603 年）、徳川家康によって江戸幕府が開かれ、江戸から各地へと通じる街道の整備が始まりました。街道の要所には宿場町が設けられ、町の中では街道を直角に曲げて『まちづくり計画』をしていたようです。その理由は、「宿場町の中を見せないようにする」、「宿場の内外を区別する」 などと考えられています。

大修館書店『新漢語林』によれば、「曲尺手」と書いて「かぎのて」と読む例も掲載されています。「曲尺（かねじゃく）」とは、「大工用具の一。長枝と短枝とから成るＬ字形の物指。長さを測り、直角を作り、仕口その他の墨掛けをするためのもの。」（彰国社『建築大辞典』第２版より）「手」は、手法、方法、策略という意味合いがあるので、「曲の手」というのは、「曲尺の形を取り入れた、まちづくりの工夫（→場所）」を指していたのかもしれません。

曲の手によって行き先が見えないことにより、町の風情の期待感を高めたり、長旅の道のりを感じさせないような効果もあったのではないでしょうか？

ぜひとも旅の疲れを癒した宿場町を歩いて、江戸の世に思い巡らせながら、「曲の手」の効果を体感してみましょう！

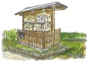
曲尺


曲の手

高札場 Ⓓ

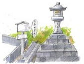
高札（こうさつ、たかふだ）は、庶民に守らせるための「法度」や「掟」を書いた板で、宿場筋や辻など人通りの多いところに掲げられました。高札場は高札を掲げた場所のことです。鳴海の高札場は、正徳元年（1711 年）に宿中央の辻（現本町交差点付近）に設けられました。間口三間（5.4m）、奥行一間（1.8m）の大きなもので、６～８枚の札が掲げられました。近隣には有松、大高にも高札がありましたが、切支丹禁制の札のみが掲示されていました。鳴海宿の高札場に掲げられていた８枚の高札が、昭和３０年代半ばまで鳴海町役場の倉庫に残されていました。冬の寒い日、古材として焚き火に使われようとしていたところを偶然発見され、市博物館で大切に保管展示されています。

現在の高札場は、「歴史を活かしたまちづくりのシンボル」として、有志により平成２1年に、名古屋都市センターのまちづくり基金の助成を受け、当初の場所より 70ｍ北に復元されました。間口は二間に縮小されましたが、高札のレプリカは細部まで忠実に再現されています。高札の文を読み解いてみてはいかがでしょうか。元々高札場があった場所には、プレートが敷設されています。


復元高札場

常夜灯 Ⓔ

宿場では火事を非常に恐れていました。高札にも放火犯人の告発や火災への心得も掲げられています。出火の関係者は厳罰に処せられました。常夜灯は旅人の目印の役目と、神を祀ることで火災を避けるため宿場の入り口に建てられました。宿場の東玄関平部には文化３年（1806 年）に建てられ、「宿中安全・・秋葉大権現、文化三丙寅正月」の文字。寛政４年（1792 年）に建てられた宿場西の玄関丹下の常夜灯とともに街道を見守っています。海における灯台のように、幾多の旅人がこの常夜灯を見つけ安心したことでしょう。有志が寄付を募り平成 15 年12 月 31日、再び常夜灯に明かりが灯されました。毎日暗くなると「防犯灯」としています。


平部常夜灯

鳴海と芭蕉

東海道の宿場町と聞くと、多くの旅人が行き交い賑わう町のイメージばかりが思い浮かび、松尾芭蕉ゆかりの史跡がこんなに鳴海に散在しているとは思ってもみないことでしょう。

宿場町として栄えた鳴海に松尾芭蕉（寛永21年（1644年）～元禄７年（1694年））が４度も訪れたことはあまり知られていません。江戸時代貞享から元禄にかけて、東西の有名な俳人や文人との交流のあった鳴海六俳仙と呼ばれる下里知足他５名は、芭蕉を後援して師弟の関係にありました。知足らが、多くの俳人・文人を呼び寄せそして下里宅が鳴海での芭蕉の宿となりました。

鳴海の俳壇は芭蕉に師事、鳴海蕉門を形成し、その流れは今日も脈々と続いています。

ゆかりの史跡として、三王山の千句塚公園の高台に芭蕉の直筆が刻まれた千鳥塚、誓願寺の境内にある芭蕉最古の供養塔、芭蕉堂があり、何れも名古屋市の史跡に指定されています。

かつて江戸と京の文化を尾張名古屋に伝える文化の拠点であった鳴海。今もこの道を歩くと芭蕉の歩いた景色に出会うことが出来ます。